

# アメリカから見た 日本政治と日米関係。

アメリカのイラク政策が転換を余儀なくされるなか、日本はどうすべきか。

## 手嶋龍一

ジャーナリスト

NHKワシントン特派員として冷戦終焉に立ち合い、「たそがれゆく日米同盟」「ニッポンFSSXを撃て」「外交敗戦」「130億ドルは砂に消えた」(いずれも新潮文庫)を執筆。これらのノンフィクションが注目され、ハーバード大学国際問題研究所にシニア・フェローとして招聘される。その後、ドイツのボン支局長、ワシントン支局長を経て、二〇〇五年独立。翌二〇〇六年に上梓したドキュメンタリー「ワルト・ダラー」(新潮社)がベストセラーに。同年十一月には「ライオンと蜘蛛の巣」佐藤優氏との対論を記した「インテリジェンス 武器なき戦争」(いずれも幻冬舎)が発刊された。



安倍政権は  
小さな政府志向か？

手嶋 カーティス先生は日本政治を米国からずっと見てこられたわけですが、『代議士の誕生』を書かれた一九七二年といまとは政治のどこがいちばん変わったとご覧になっていますか。

カーティス 対立軸がなくなったことと活気がなくなったこと、そして選挙制度が悪くなったこと。よく言ったのは透明度が少し高まったことだと思います。当時は冷戦時代でし



## ジェラルド・カーティス

コロンビア大学教授  
ニューメキシコ大学卒業。コロンビア大学政治学博士課程修了。同大学助教授などを経て現職。一九七四年から九〇年までコロンビア大学東アジア研究所所長を務める。米田富指の知日派として著名。著書に『代議士の誕生』『日本型政治の本質』『永田町政治の攻防』などがある。

たから対立軸が明確だったけれども、いまは与党と野党を区別するものがはっきりしなくなった。

手嶋 対立軸ということではいいますと、民主党は労働組合にも基盤を持つていることもあって明らかに大きな政府ですね。かといって自民党が小さな政府を志向しているかという疑問です。

カーティス 自民党はやはり政治家と官僚、財界が手を組んで日本を引っ張っていくという考え方が長い間強かったでしょう。これはアメリカと全然違いますね。社会主義国とも

違う。日本の場合には一種の共同体意識があるから日本型資本主義あるいは日本型社会主義ができたわけです。今でも、自民党が本当に小さな政府、規制緩和を望んでいるかどうかは疑問です。しかし、九〇年代になってから、官僚に対しての不信感が広がって、企業と市民社会に対しての政府の影響力と権限が著しく縮小しました。そういう意味では前よりだいぶ小さな政府になりました。

手嶋 いまのお話はまさに安倍政権への支持が海外も含めてなぜ定着しないのかということについての本質

的な指摘だと思います。小泉さんは明らかに小さな政府を志向したけれども、その後継者である安倍さんは本当にそうなのかどうか疑わしいと人々は考えています。

カーティス 問題は、日本国内から見ても、ワシントンから見ても、安倍政権が何をめざし、どういう政策を追求しようとしているのかよく見えないことです。これから見えてくるのか、ますます見えなくなるのかわかりませんが。

手嶋 小泉さんがしたたかだったのはそのところで、争点をあえて際立たせるために抵抗勢力という敵の所在を明確にした。それが小泉劇場といわれるものだったわけですね。

カーティス それと、彼は政策の優先順位がはっきりしていましたよね。不良債権の解消と郵政民営化。だからわかりやすかった。私は、彼はよくやったと思います。

手嶋 しかし外交については、対北朝鮮外交を含めて僕は高い評価を与えるわけにはいかないと思います。カーティス そこは意見が分かれるところだと思いますが、彼の外交に対する考え方はきわめてシンプルで、とにかくアメリカと仲良くすることが日本の国益であると。とくに九・一一事件後はよき同盟国であることをブッシュ大統領に見せたくて、テロ特措法を通してイラクに自衛隊を送った。しかしアメリカと仲良くすればすべてオーライだというのは、私は違うと思います。

ただ、対北朝鮮政策だけは、彼は本当に国交正常化をやりたいかった。彼の問題意識は北朝鮮に核を放棄させることで、私は小泉さんの北朝鮮に対する対応を評価しています。手嶋 そこは先生とは違って僕はまったく評価しません。小泉さんの狙いは、北朝鮮との国交回復ではな

から日本との交渉に踏み切ったかもしれません。それに対してアメリカ政府は北朝鮮に接近しないよう日本に圧力をかけたわけです。しかし小泉さんはそれを振り切って訪朝した。ポピュリズムだけじゃないと思う。小泉総理はブッシュ大統領と仲が良いのが日本人に評価され、もし北朝鮮のことで、その関係がこじれたならば、小泉さんは批判を浴びたでしょう。そのリスクがあるとわかりながらも、平壤へ行ったのを私は評価します。

手嶋 でも、同盟外交の作法からすれば、小泉さんはブッシュ大統領に「平壤に行きますよ」と十分に、事前に内報すべきだったのです。ブッシュさんは内心かなり怒ったのですが、イラク戦争に日本の協力が必要だから堪えたのです。

もう一つ重要なことは、北朝鮮は二つの核開発を進めていたわけです。

ったのです。やはりポピュリズム(大衆迎合)に根ざしたものです。田中真紀子外相を更迭したことで内閣支持率が三〇割台にまで落ちた。それを上げるために平壤に行き、世論をあっといさせたと思います。



ところがこうした外交は非常に危険な要素をはらんでいる。ブッシュ大統領はその半年前、二〇〇二年一月末の一般教書演説のなかでイラク、イラン、北朝鮮を「悪の枢軸」と名指ししたわけです。当時、アメリカ

一つはブルトニウム型、これは九四年の枠組み合意で一応止めている。もう一つは濃縮ウラン型です。で、小泉さんが訪朝を発表した段階では、アメリカはその情報に完全な裏付けはなかったけれども、小泉訪朝、つまり日朝平壤宣言の翌月、濃縮ウラン型核開発の決定的な証拠を突き付けて北朝鮮に認めさせた。

ここでアメリカは事実上、小泉さんの北朝鮮外交の息の根を止めたわけです。日米間にはこんな重要な問題で大きな食い違いがあったのです。これでは日米同盟が機能しているとはとてもいえません。

カーティス 私が理解しているかぎりでは、金正日は拉致がある程度認めれば年内に国交正常化ができると思っていたし、小泉さんもそう考えていた。もしそうなったらブッシュ大統領は怒ったはずですが、にもかかわらず彼は国交正常化に向けて努力

はすでにアフガニスタンでタリバン政権を攻撃し、次の武力行使の焦点はイラクに向けられていた。そのため金正日総書記は非常な恐怖心に駆られ、小泉工作に動いたのです。

もしアメリカが北朝鮮を攻撃するとすれば、その足がかりは日米同盟です。そこで日本を取り込み、日米を分断しようと考えた。

当時の交渉当事者は「年内に国交正常化をする」とはつきり言っていました。ポピュリズムのために金正日の戦略に乗ったところに小泉さんの対北朝鮮外交の落ち度があったと思います。

## 小泉外交と日米関係

カーティス それは小泉さんに対して厳しすぎると思います。おっしゃるように金正日には攻撃されるかもしれないという恐怖感があった。だ

した。私はそれを評価します。手嶋 そこはかなり決定的な意見の違いですね。

カーティス 私は日本がそういう方向に行っていれば、アメリカの対北朝鮮政策に対してプラスの意味で大きな影響を与えたと思います。ただ、小泉さんも金正日も読み間違えたんですよ、拉致に対する日本国民の怒りを。

手嶋 今回の六カ国協議で、北朝鮮が核放棄に向けて「初期段階の措置」を受け入れれば日本を除く各国は五万トンの重油を提供する、さらなる核廃棄に進めばさらに重油九五万トンの支援を行う、ということと合意しました。

日米同盟史上、アメリカが交渉をまとめる、そして日本が小切手を切るというのが通例でした。カーティス ええ。

手嶋 今回はそういう構図ではない



リスに守ってもらいながらこれほどアメリカから感謝されるというのは、それこそしたたかな外交ですよ。(笑)

手嶋 いま非常に重要なことをおっしゃったと思います。アメリカの人たちは日本に感謝している。ならば、なおのこと一連の問題発言はそういう人たちの気持ちに冷水をかけることになりますね。

カーティス 私も自分のなかで矛盾しているなと思うのは、あの戦争は大間違いで、その後の政策も失敗ばかりだった。ただし、それを支持した日本政府の政策が間違っているとは言いい切れない。というのは、日本の国益を考えたときに、やはりアメリカとの関係は非常に重要で、イラク戦争を支持しなかったら日米関係は危機的な状況になっていた可能性があるからです。

手嶋 先生のような名うての知日派

カーティス 元国務長官を含めた委員会がイラク戦争をどう終結させるかというところで動き出しています。そのいちばんのポイントは、イランやシリアなどアラブ強硬派とも関係改善を図りながらイラク戦争の泥沼から脱却しようとする。

カーティス イランやシリアのような国とは交渉するものではないというのがチェイニー副大統領やネオコンの考え方ですが、交渉というのは敵であるからこそすべきであって、日本が「そういう国々とも交渉して中東の安定を図るべきだ」ということを言えば……。

手嶋 「日本がそれを手伝いしましょうか」という形で、アメリカをイラクから抜け出させるべきです。ただ、イラク戦争の大きな方向を変えるにはやはり来年のアメリカ大統領選の結果を待たなければならぬかもしれませぬ。

の貴重な発言だけに、ブッシュ大統領のイラクへの力の行使が正義だったかどうかは別として考えさせられます。日本は「理解」を超えてなぜ、「支持」したのか、もつと議論を尽くすべきです。

もし支持しなかったら、北朝鮮が日本を攻撃した場合、アメリカが「日本の立場は理解できる。理解できるけれども、どう行動するかはよく考えます」ということになる可能性だつてあるのです。日米安保条約があるからといって必ずしもアメリカの若者を生命の危険にさらすとはかぎらないわけですから。

## もつと柔軟な 中東政策を

カーティス ただ、イラク問題についての日本の立場は以前より難しくなったと思います。よく「バスに乗り遅れるな」と言いますが、バスか

カーティス 悲しいのは、いまの状況がベトナム戦争の末期によく似ていることです。当時、ジョンソン大統領は自分の政策がうまくいくと思わないまま最後までその政策を続けてしまった。ブッシュ大統領も、二万一〇〇〇人を増派するけれども、「絶対に大丈夫だ」という自信はないわけだ。

その結果、成功する可能性のない政策を続けてアメリカの若い兵士やイラクの市民が殺される。

そして、次の大統領になれば、共和党が勝とうと民主党が勝とうと一年から一年半以内に撤兵せざるを得ない。

要するに負けるわけです。これは最悪のシナリオですが、より明るいシナリオは描けないのです。ですから来年の大統領選はイラク戦争終結のためにはどうすればいいか中東政策をどう改めるべきかということが

ら降りることも大切です。

日本が開戦当時と同じような表現でブッシュ政権のイラク政策を支持していると、気がついてみたら、バスに乗っているのはブッシュ大統領と安倍さんの二人だけだった(笑)ということになりかねない。

手嶋 ブレア政権も実質的には降りましたからね。

カーティス ですから日本としては柔軟に自分の国益を考えることで、日本政府が積極的なことをいわずに批判だけをすれば、これは、アメリカ人はイラク戦争に反対した人でさえ喜びません。

だからたとえば日本はイランと前からパイプがあるし、圧倒的に中東の石油に依存しているわけですから、イランの問題についてもつと積極的に発言できないのかなと。

手嶋 おっしゃるとおりだと思います。いまブッシュ政権のもとで、ベ

最大の争点になるでしょうね。

手嶋 先生のお国の大統領選ではありますが、僕らも同じバスに乗っているわけですから、ぜひ優れた大統領を選んでください。(笑)

カーティス 日本としての一つの問題は、よく民主党より共和党のほうが親日的だといわれるでしょう。だからとくに自民党の政治家は民主党の人たちとの付き合いがあまりない。アメリカは日本と違って常に政権交代が起こりますから、共和党とも民主党とも、保守的な人たちともリアルな人たちともたえずコネクションを持っておくべきなんです。

手嶋 きょうは貴重なお話をありがとうございました。しかもこれほど明晰で論理的な日本語で。日本の政治家も外交官もそしてメディアも、きょう先生がおっしゃったような視点を持つべきだし、僕らも持たなければいけませんね。